

生誕250年 古典派とロマン派 “ベートーヴェン” 第2回
を繋いだ楽聖

プログラム

今年生誕250年に当たるドイツの生んだ偉大な作曲家ベートーヴェン特集するシリーズの第2回目をお送りします。ベートーヴェンは生涯10曲のヴァイオリン・ソナタを残しましたが、そのうちの9曲は33歳の1803年までに作曲されています。ヴァイオリン・ソナタ第5番「春」は1801年に完成され、賛助者のモーリッツ・フォン・フリース伯爵に献呈されました。「春」という名称は後世になってから付けられました。春の訪れを思わせる明るく幸福感に満ちた曲想はその名にふさわしい美しさを持っています。この頃のベートーヴェンは、既に難聴に悩まされていましたが、“不滅の恋人”のひとりとしてされる伯爵令嬢ジュリエッタ・グィチヤルディに恋していた時期と重なり、それが曲に反映されているとも言われています。ヴァイオリンとピアノが二重奏のように対等に進み、4楽章構成にする等、より自由に深化した名曲です。1800年スプリング・ソナタと同時期にピアノ協奏曲第3番ハ短調が作曲されました。5曲あるピアノ協奏曲のうち第1番と第2番も魅力のある作品ですが、まだハイドンやモーツァルトのスタイルを踏襲していてベートーヴェンの個性は全開していませんでした。この第3番は完全にベートーヴェンの個性が確立された最初の協奏曲です。ピアノ独奏部は深い情緒と力強い即興性が強くなり、オーケストラもシンフォニックな響きに満たされています。ベートーヴェン唯一の短調で書かれたピアノ協奏曲の傑作です。プロシアのルイ・フェルディナント公に捧げられました。耳の病に苦しめられていたベートーヴェンは1800年頃から毎夏ウィーン郊外のハイリゲンシュタットで過ごすようになりますが、自然にひたり、散歩をしながらその生活を楽しんでいました。そんな中で生まれたのが、1808年に作曲された交響曲第6番ハ長調「田園」です。随所に自然の描写を持つ一種の標題音楽ですが、自身では“絵画というより、むしろ気分の表現”として作曲したようです。第6番は1808年12月22日、ほぼ同時期に完成した第5番と一緒にベートーヴェンの指揮で初演されました。この2曲はいわば双子のように生まれましたが、あらゆる点で異なっています。第5番が何年もの歳月をかけて完成したのに対し、第6番は1年たらずで一気に作曲されています。曲の性格も第5番が深刻な運命との対決がテーマになっていますが、第6番は大自然を見据え美しく幸福な感情を全面に出しています。ベートーヴェンの自然に対する感謝の歌とも言える名曲です。

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827):

ヴァイオリン・ソナタ第5番ハ長調op.24 “春” ~ 第1楽章、第2楽章、第4楽章から

第1楽章 アレグロ 第2楽章 アダージョ・モルト・エスプレッシオーヴォ
第3楽章 スケルツォ、アレグロ・モルト 第4楽章 アレグロ・マ・ノン・トロッポ
イツァーク・パールマン (ヴァイオリン) / ウラディーミル・アシユケナージ (ピアノ)
(1980.6.14 神奈川県民ホールでのLive)

交響曲第6番ハ長調op.68 “田園” ~ 第1楽章、第2楽章、第4楽章、第5楽章

第1楽章 田舎に到着したときの愉快的感情の目覚め 第2楽章 小川のほとりの情景
第3楽章 田舎の人々の楽しい集い 第4楽章 雷雨、嵐
第5楽章 牧歌 嵐の後の喜ばしい感謝の気持ち
カール・ベーム指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1971.5.14 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

*** 休憩 ***

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827):

ピアノ協奏曲第3番ハ短調op.37

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 第2楽章 ラルゴ
第3楽章 ロンド、アレグロ ~ プレスト
ジーナ・バツカウアー (ピアノ)
エリアフ・インバル指揮フランクフルト放送交響楽団
(1975.12.12 ヘッセン放送協会大ホールでのLive)